

Q3 道徳の授業で読み物資料の特徴を生かした指導をしたいが、どのようにしたらよいか。

A： 登場人物の道徳的な行為を含んだ読み物資料を用いることが多く見られる道徳の時間においては、資料を効果的に生かすことが大切である。そのための工夫としては、登場人物への共感を中心とした展開、資料に対する感動を大事にする展開、迷いや葛藤を大切に展開、知見や気づきを得ることを重視した展開、批判的な見方を含めた展開などが考えられる。そのうち、登場人物への共感を中心とした展開、資料に対する感動を大事にする展開について説明する。

1 登場人物への共感を中心とした展開

(1) この展開にみられる特徴

資料中の人物がどんな気持ちなのか、どんなことを考えているのかについて、共感的に追求する展開が考えられる。資料に出会った子どもは、資料中の人物に身をおいて考える。教師は子どもの登場人物への共感が深まるように発問を投げかけ、子どもの気持ちを掘り起こし、価値の自覚が促されるようにする。

このような展開では、例えば、次のような発問がよく見られる。

- ・ ~はどう思っているのだろうか。
- ・ ~の気持は、今、どんなだろう。
- ・ ~は、心の中で何を考えているのだろうか。
- ・ ~は、どんなふうにも迷っているのだろうか。
- ・ ~は、何を感じていたのだろうか。 など

授業では、登場人物の行為の変化や場面の転換などに即して発問が置かれることが多い。その中で、子どもが資料を自分自身を見つめるための鏡として、悩みや心の揺れ、葛藤などを投影させる。

(2) 指導の効果を高める工夫

登場人物の心の動きに抑揚があり、変化が浮き彫りになっている資料を選ぶ

人物の心の動きにメリハリや深みのある資料は共感を深めるのに適している。例えば、生活の中で起こりがちな出来事を生かした資料が考えられる。子どもは日常体験をそのまま重ねて共感的に追求することができる。また、寓話や史話、外国の人の話など子どもの生活実感から離れているものも、自由な想像によって共感しやすい。むしろそのような資料の方が、子どもの心に深く刻まれ、長く残るといった側面もある。

登場人物に子どもが自分の思いを投影しやすい発問の組み立てをする

登場人物の気持ちや考えの変化の節目に着目して問いかけ、子ども自身の思いが映し出されるようにする。そのためにも、事前に資料内容の構造的なスケッチなどの資料分析を行い、資料を生かす発問の組み立てを考えることが大切になる。

登場人物の気持ちについての多様な感じ方、考えを引き出す

話し合うだけでなく、道徳ノートに書く時間を確保したり、役割演技や動作化、劇などの表現活動を組んだりすることによって、感じ方、考え方がより多様に引き出される。それを、心情図などで目に見えるようにすることも工夫の一つである。

多様な感じ方、考え方を類別的、対比的にとらえられるようにする

多様な考え方の違いを板書で類別したり、色分けしたりすることによって、一人一人が自分の考え方などを、他と比べながらより深く自覚できるようにする。

(3) 留意したいこと

このような展開では、必然、場面の節目ごとに前から順接的に心情を問うような授業が多くなる。したがって、教師の発問だけに引きずられたり、平板に流れになってしまったりする面もある。話合いに変化を生む工夫や意欲を高める工夫などを織り込む努力を大切にしたい。

2 資料に対する感動を大事にする展開

(1) この展開にみられる特徴

資料の展開や主人公の行為に行為に強い感動を受けることがある。感動は子どもの心を揺さぶり、夢やあこがれを強くする、そのような資料への感動性を大切にされた道徳の時間の展開が考えられる。道徳の時間における感動は、登場人物等の道徳的な営みや生き方への感動が中心となる。また、友達の様々な感動の中身やそれとの違いに気付くことで、子どもの心により深く刻まれる。

感動を深めることを特に意図した道徳の時間の話し合いでは、次のような展開が多く見られる。

- ・どんなことを強く感じたか。
- ・どんなところが心に強く残ったか。
- ・自分が特に心を動かされたのはどこか。
- ・そこが心を強く打つのはどうしてか。
- ・すごいな、おどろいたななどと感じたのは、どんなところか。 など

子どもの心は純粋であり、資料などから深く感じ取り、感動する資質を豊かにもっている。その資質を引き出す上で、道徳の時間は大きな役割を担っている。

(2) 指導の効果を高める工夫

感動性の豊かな資料を選びすぎる

「人間の感性に訴え、感動性の豊かな資料」や「人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料」など、教師も感動するような、感動性豊かな資料を選びすぎるのが重要である。

資料提示等での雰囲気工夫する

資料内容を感動的に受け止められるような資料との出会いを工夫する。教室環境、タイミング、感じ取る呼吸に合わせた読み方、効果音楽の利用などの雰囲気づくりが、具体的な工夫として考えられる。

感動が表現できる場を豊かにする

子どもの自然な感動の中身を引き出すために、それをじっくりと表現できる場の工夫をする。また、それらを交えることによって、子どもは自分と同じ、あるいは違う多様な感動に触れ、感動が温められる。

感動したわけなどについて考えられるようにする

なぜ感動したのか、どうしてそこが素晴らしいと思うのか、自分と比べてどうなのかなどと考える機会をつくる。そのことによって、資料から受けた感動と自己の生き方とをつなげて考えることができる。

(3) 留意したいこと

道徳の時間は、ただ感動を味わうだけでなく、多様な感じ方を交えることによって、深め合えることの醍醐味を生かすことが大切である。一人一人が自分の感動に浸るだけでは、自宅でテレビを見たり本を読んだりする場合と変わらないことにもなる。また、登場人物への共感が深まるほど感動が深められるという側面もある。展開の中に共感的な追求を織り込んで感動を深めるという工夫も考えることが大切である。

参考資料 「小(中)学校学習指導要領解説 道徳編」
「初等教育資料 平成15年6月号」